

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番10
TEL.0258-322811

◆スタッフ◆

小林国二・小林善秋・高橋翠・室賀清輝
高橋利春・加瀬由紀子・屋代健
近藤マリ子・近藤真弘・近藤善信

後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社



ご家族の皆さままでご覧ください

観音様、赤鬼の不思議

翠巖 弘

上の写真は、須彌壇に向かつて左側に祀られております。中央の船玉地藏尊を中心に大小四体のお地藏様、赤・青鬼、十体の舟人足(安善寺の裏を流れております柿川を利用しての物資の積み荷などの仕事をされていた)の人形が安置されております。平成五年、六年の本堂大改修の前は、本堂入ってすぐの廊下の左側突き当たりには祀られており、子供の頃は悪いことをすると「鬼の所へ連れていくぞ」などといわれ、両鬼がひどく怖く感じたことが懐かしく思い出されます。

平成十六年十月廿三日の新潟県中越大地震の時は、本堂も大被害を受けましたが、位牌堂に祀られておりました四天王様、本堂左側の三十三観音様の中で二段目に祀られていた観音様方のいちばん東側の二体だけが、一段目の観音様方を飛び越えて落ち、本尊様をはじめ、多くの佛様方の身代わりとして軽い怪我をされました。他に赤鬼(向かって左側)だけが数メートルはなれた大木魚の傍まで飛ばされておりました。

当時は本堂などの修復のことで頭がいっぱいでしたが、十年半近く過ぎた今日でも、三十三観音様、赤・青鬼の並んで安置されているのを見ると、他の観音様方、隣の青鬼やお地藏様方、人形の方々がそのままだったのに、二体の観音様、赤鬼だけが飛ばされたのが不思議でしかたありません。皆様も春の彼岸などで参詣の折、観音様、お地藏様を御詣りいただき、二体の観音様、赤鬼だけが飛ばされた不思議を感じてみてください。

毎年長岡市仏教会主催でお釈迦様の誕生をお祝いする「花まつり」が、今年で九十回を迎えます。お釈迦様は四月八日にルンビニーでお生れになりましたが、長岡では五月五日、子供の日の十二時頃より、大手通りの自由広場を会場に(雨天の場合はアオーレ長岡のアリーナ)お練り・花祭り法要・稚児お育て法要などが行われます。皆さま方も、お子さん、お孫さん共々参加していただき誕生のお祝いをお願いいたします。

【日々精進(二十八)】

仏教徒の聖地「インド」で感じたこと

近藤 真弘

「あー暑いー」そんな言葉を想像していましたが、降り立ったデリーの空港は日も暮れていたせいから快適な気温でした。

この度、二月十七日より十日間「インド仏跡巡りと世界遺産の旅」に行つてまいりました。

言わずと知れたインドという国はお釈迦様の息吹漂う、仏教徒にとつてはまさに聖地の数々を擁する国です。私もいつか一度は行つてみたい、行かなければいけない、そんな思いのある国でした。今回ご縁があり十日間の日程でネパールも含めお釈迦様の足跡をたどつてまいりました。

今回の旅では多くのことが印象に残りましたが、大きく思い出に残つたことが三つありました。一

つは道中の車窓からの風景です。これは所謂今のインドを自分の目で見た真実の様子です。思った以上に衝撃を受けました。日本でも当然都会と田舎の景色は違います。しかし裸足の子供、沼のような綺麗とは言えないところでの水浴びや洗濯、道端には煙を出した山積みゴミ、そして藁の住まい。テレビや本などではなんとなく見たことがある状況ですがそれを目の当たりにしていささかのショックを受けました。これを戦後の日本の風景だとおっしゃる方もいます。しかし戦後の様子を見たことのない私にとってリアルなその風景は日本では見ることのない初めての光景でした。始めはそんな風景を見てこんなところ

にそんな状況で住んでいるのは可哀想だなと思いましたが。しかし旅を重ねているうちにその光景の中で気付いたのが、とても愛くるしく純粋な子供たちの笑顔です。仏跡を巡っていた私たちはおそらく普段は外国人が通ることのない道もバスで通つたのではないでしょう。すれ違う村の人たちは皆物珍しそうにこちらに視線を送っていました。

その中でも子供たちはこちらに気付くと皆、笑顔で手を振ってくれます。楽しそうに駆け回って遊んでいる子もたくさんいました。外で元気に遊びまわる子供の姿、逆に今の日本ではあまり見かけなくなつた光景です。どちらが幸せなのか、何が幸せなのか、幸せの基準は人

によって違います。ただ少なくともそこで無邪気に遊んでいる子供の笑顔は素敵な笑顔であり、色々と考えさせられました。

次に印象深かつたのは、ガンジス川の沐浴です。今回の旅は曹洞宗の僧侶九



ガンジス川で沐浴する人達

人と一般の方が二名、添乗員さん一名の少人数ではありますが、そのうち私を含め、九人がガンジス川



飯泉さんと茶毘塚にて

で沐浴を行いました。ヒンドゥー教の聖地であるガンジス川では多くの方が沐浴し、火葬も行われ、お骨は川に流されます。そんな神聖な川で沐浴させていただいたことも大変思い出に残り、その後のガンジス川から上る朝日も印象的でした。

最後はお釈迦様が入滅されたクシナガルの茶毘塚での法要です。この旅ではそれぞれの仏跡で一人一人が順番に導師を勤め、法要を行いました。私は六日目に茶毘塚での法要の導師を勤めさせていただきました。

茶毘塚はお釈迦様が火葬された場所で、レンガ積みみの塚があり、お釈迦様のお骨も納められています。

ここには一般にも分骨をされる方も多く、私の母方の祖父である乙川禅師様や安善寺のお檀家で今回添乗をされたBS観光の飯泉さんのお父様も茶毘塚に分骨されています。そんな因縁深いところで導師を勤めさせていただき、法要中はお釈迦様を含めたお三方に思いを巡らし、とても感慨深く、有難い経験をさせていただきました。

十日間という行程でまだまだ枚挙にいとまがない思い出や、経験がありましたが、今後はこれらの経験を自分自身の成長と、布教に役立てていきたいと思ひます。十日間共に旅をしてお世話になつた皆様に感謝いたします。

我が青春の記

長岡市本町 石丸豊和

七十歳を超え、最近は同期会が盛んである。小学校は不定期、中学校はオリンピックの年、高校は毎年の同窓会の後、そして大学は三年に一度、各幹事而努力で行われている。

した。

そんな彼から、テントを背負ってキャンプをしながら九州旅行に誘われたのは大学二年の春休みであった。ワンダーフォー

ーゲル部で鍛えた彼の強靱な体はキャンプ用具を楽々運んでくれること請け合いで、私は旅行計画からすべてお任せの呑気ものに徹した。

どの同期会も思い出深い友は多いが、とりわけ大学時代に千葉県市川市で三年間同じ下宿だった木村邦男君との思い出は深い。彼は北海道旭川市の出身でワンダーフォーゲル部。私は詩吟部に所属していた。

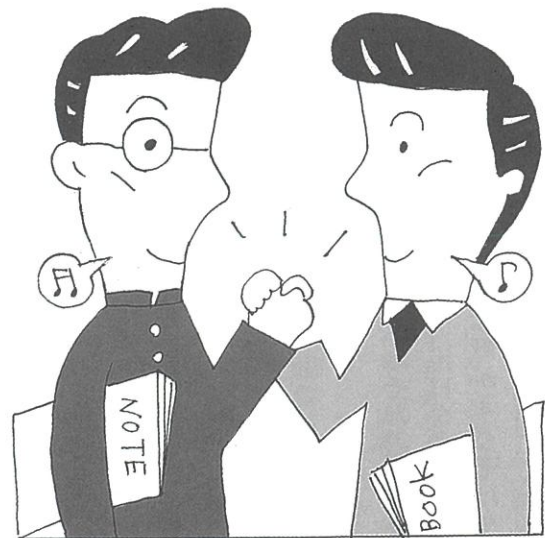


昭和40年3月7日 開聞岳頂上にて（左が木村君、右が私）

昭和四十一年二月二十五日、バイトで稼いだ資金を懐に、東京駅から二週間の九州旅行に出かけた。熊本↓別府↓宮崎↓鹿児島↓長崎が旅行ルートであった。

旅行中で一番印象に残っているのは、鹿児島県薩摩半島先端にある開聞岳の登頂だ。薩摩富士とも呼ばれ標高九百二十四メートル、後に日本百名山の一つになった円錐形の名峰である。登山はとにかく木村君について行くのが精一杯で、彼は走るようにしてヒョイヒョイと登っていく。おかげで普通二時間かかるところ一時間三十分で登りきった。ここで学んだこと、

成爲せば成る。頂上の眺望は格別で、



緑と黄色が織りなす田畑は実に美しく、池田湖や錦江湾（鹿児島湾）、そして東シナ海を見ながら南九州の春にしばしポーズとしていた。

そして、旅の終わりに

は路銀も尽き、長崎からは飲まず食わずで夜行列車の床にごろ寝して東京駅にたどり着いたのは三月十日の朝であった。木村君と私は卒業旅行後、それぞれ地元金融機関に就職した。彼はその後山に出かけ、毎年

働き者だった 母の思い出

江口 由美



丘陵公園のバラ園にて

それは本当に突然でした。倒れる前の日はみぞれ交じりの雪。雪深い里に生まれ育った母にとつて雪かきは日課のひとつ。その日も家の前にうつつら積もった雪をきれいにしてくれました。夕飯もいつもどおり山盛りのご飯と焼き魚と野菜の胡麻和えをおいしそうに食べ、ご機嫌で布団に入ったのでした。

その翌朝。くも膜下出血をおこし、日赤に救急搬送しましたが、二日後に旅立ちました。八十二歳。とても安らかな旅立ちでした。

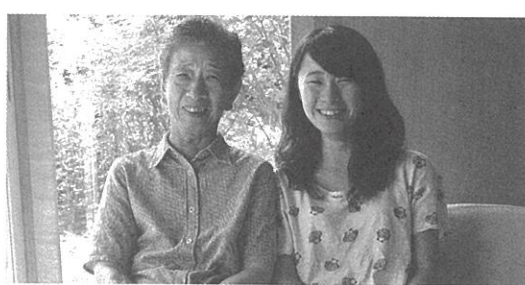
自分自身の父を四歳の時に亡くし、母一人子一人で育ってきた母。小学生のころは自然いっぱい環境の中で、友だちと一緒に夏は川遊び、冬はスキーにと、たっぷり遊んだそうです。同級生ととても仲良く、夏休みも一緒に集まって宿題をやっていたと、その頃を思い出して話してくれました。

また、一人っ子だったので、母親が仕事で忙しい時は、ご近所のお年寄りが面倒みてくれたそうです。

十代半ばで生まれ育った土地を離れ、長岡に出てきた母ですが、生まれ故郷の田沢(今は十日町市になりました)への思いは大きく、繰り返し繰り返し思ひ出話をしていました。

長岡に出てきてからは、寮生活を送りながら、学校に通いました。母にとつては、その寮生活がとて

も楽しかったようです。それこそ食べるものも十分になく、毎日のひもじい思いをどうまぎらわすか友だちと知恵を絞った話や、舎監の先生の思い出など、何度もおもしろおかしく語ってくれました。その時できた友だちとは、亡くなるまでずっと交遊が続きました。歳をとつてからは年に一回か二回しか会う機会を持てなかつたようですが、母はその日をとて楽しみにしていました。母は本当に友だちに恵まれた人でした。



大学生になった孫と一緒に

心にいて、春の日のおひさまのようにあたたかく微笑んでいました。

五十代半ばで仕事を辞めてからも、働き者であることに変わりはありませんでした。休むことを知らないかように、私の目には映っていません。例えば神奈川に住む孫が、具合が悪くなつたと連絡が入れば、すぐに新幹線に乗って手伝いに行きました。その母である自分の娘が仕事を休めないことを知っているからです。やつと具合がよくなつて、幼稚

園に通えるようになったからと長岡に帰ってきたら、その翌日また呼び戻され、神奈川にとんぼ返りということもたびたびあつたようです。

ようやく少しのんびりできたのは、二年半前に父が亡くなった後でしょう。父は五年余り入院を繰り返して亡くなったので、母はその看病で心身ともに疲労していました。父をしつかり見送ることができ、母は自分の大きな役割を果たすことができたと感じていたと思います。

さばさばした性格で、終わつたことをいつまでもよくよく考えていてもしょうがない、前を向いていこうよ、というのが母の口癖でした。母が亡くなって二か月が過ぎた今、私はその言葉を噛みしめ、毎日を過ごしています。母がすぐそばで私を見守っていてくれることを感じながら。

先住様



安善寺開山堂・位牌堂の正面には、当山御開山・長翁存宗大和尚様が正面に、向かって右に大本山永平寺御開山・高祖承陽大師、永平道元禪師様、左に大本山總持寺御開山・大祖常濟大師、瑩山紹瑾禪師様、その前に安善寺代々の住職様方のお位牌が祀られております。

右の写真は、本堂左側にあり、昔から先住様と
言われてきました。安善寺では戊辰の役で伽藍を兵火で焼失した後、廿三世・陪庵養門様が再建されましたが、示寂された後は、この場所に、その後にも前住のお位牌だけがこの場所に祀られてきました。中央の厨子の中のガラスの壺には、廿三世・廿四世・廿五世・廿六世の分骨が収められております。両脇には前住、廿六世・雲巖見龍大和尚、北海道涌別町にあります廣福寺の二世、前住の兄弟

子であられた、大心貫道大和尚様、未寺の妙喜寺の先住兄弟弟子、並びにお弟子さん方のお位牌が祀られております。他に、六日町の雲洞庵、足柄市の大雄山・最乗寺住職をされた後、大本山總持寺獨住第五世・穆英石禪師、新井石禪大和尚様のお位牌も祀られております。先代が元氣なころ御聞きしたところ、石禪禪師様は、安善寺廿五世の時代、親しくよく安善寺に來られたそうです。

また、後を継がれ、雲洞庵四十五世になられた新井石龍御老師が学生時代、冬期には安善寺に下宿され、旧制長岡中学に通われたそうです。石禪禪師様、雲洞庵様とは大変因縁が深く、禪師様示寂された後すぐに、お位牌をお祀りさせていただいたそうです。

皆様方も位牌堂にお参りの時は、先住様、開山様にもお参りいただければと思います。

翠巖

旅立ち

- 平成廿七年一月～二月末日まで
- 矢澤一夫様 一月十四日寂 長岡市美園
 - 増田ミヨシ 一月廿二日寂 長岡市川崎
 - 中山栄子様 一月廿二日寂 茨城県竜ヶ崎
 - 田中秀幸様 一月廿九日寂 長岡市南町
 - 根岸芳郎様 一月卅日寂 長岡市川崎
 - 五十嵐ミナエ様 二月一日寂 横浜市南区
 - 田中照子様 二月一日寂 長岡市呉服町
 - 伊賀政次様 二月六日寂 長岡市住吉
 - 笠井博様 二月十七日寂 長岡市三ツ郷屋
 - 相田由明様 二月廿日寂 長岡市深沢町
 - 岩永敏之様 一月廿八日寂 埼玉県東松山市
- ご冥福をお祈りします。



楽々のらく語

会場 安善寺本堂 長岡市神田町1-4-10 電話0258-32-2811
日時 2015年5月19日(火曜日) 午後6:30～
参加費 1,000円

新潟県警元警部・三流亭楽々さんからどんな落語が聞けるかたのしみです
プロフィール

昭和63年から新潟県警に勤める傍ら、新潟落語会入会
交通安全落語・防犯落語・振り込め詐欺防止落語等を創作
第4回社会人落語日本一決定戦優勝・新潟日報コラム「甘口・辛口」連載
NHK朝の随想(平成25年上半年)放送



笑の会：第20回

*お申込み・お問い合わせ先 安善寺(32)2811
【KAKA】の会(KAKA笑・呵呵笑とは「大きな声で笑う」ことを意味します)
新しい文化の発信基地として、日本文化の基である仏教に関心を元、現代に生きる仏教の発信の場として安善寺をもっと身近に親しみ、活用してもらおうと発足した会です。

旬歌 愁灯

[三十四話]

「氷の世界」

加瀬由紀子

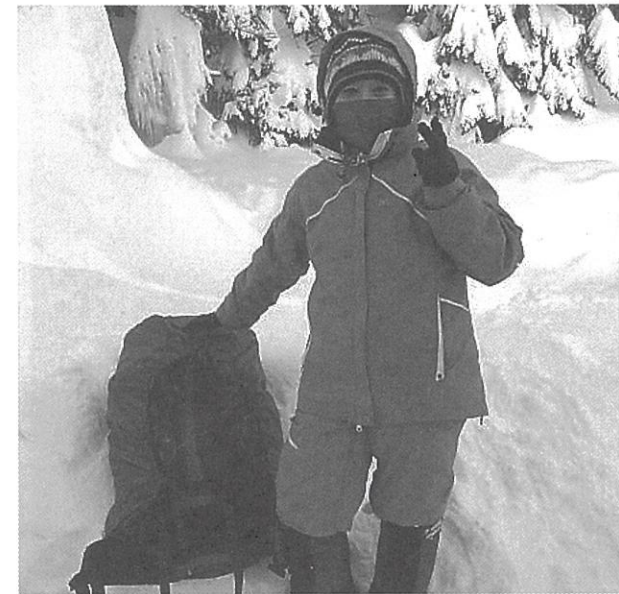
八ヶ岳へ登ったのは、二年前の夏だった。快晴に恵まれた単独行は順調で、主峰赤岳、尾根伝いに横岳、硫黄岳、天狗岳と三千メートル近い峰々の縦走を満喫した。

ネパールトレッキングの予行演習を兼ねて「八ヶ岳・氷の世界」を堪能しようと、信濃路へツレの軽自動車を走らせる。いい車だと痛むからボロいので行こう、と嬉しい提案に乗ったのが、やがて裏目に出る…。

高速道路をひた走り、諏訪南インターに降りる。カラマツ林の道の路面は雪に覆われ凍結、美濃戸口でチェーン装着。「ハシゴ状に並べるのを手伝うよ」と言うと、「いつの時代のチェーン？ 今は軽くフックをかけて走れば、自然

に締まるんだよ」と笑われる。無事装着し、美濃戸へと左折。真つ直ぐ進めば、御柱祭の御神木の切り出し場で有名な御小屋尾根で、阿弥陀岳(二月半に遭難事故発生)に至る。ところがアイスバーンの林道で立ち往生。しばし前進、バックを繰り返す。空転するタイヤを見てツレは「あつ、前輪駆動だから前に装着しなければダメだった!」。いい加減にしてよ! 最新式チェーンもかなりのタイムロスとなり、やり直して美濃戸山荘の駐車場着。

ようやく登山靴にアイゼンを着けて出発。すでに午後の日差しがまぶしい。ツレのザックは特注でテントなど三十キロ近い。私も寝袋、食料など二十キロを担いで凍結した登山道を汗ばみながら登り始めた。「着いたら持つてきた苳シロップで甘いかき氷を作つてやるよ!」

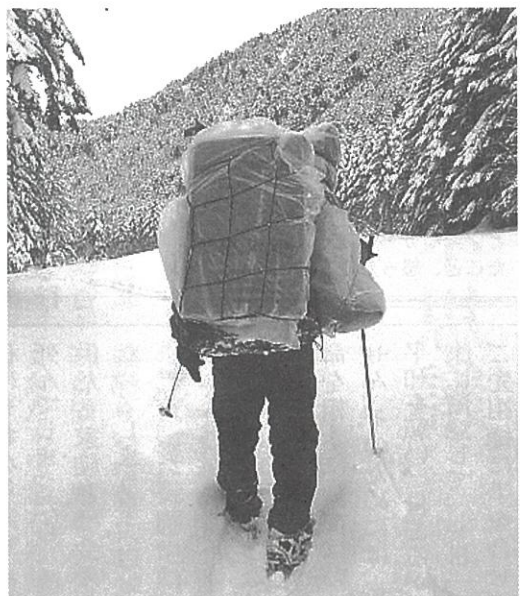


鼻歌まじりに登山開始

夏場はほぼ走つて降りた南沢も、今は雪と氷の世界だ。重さに喘ぎながらも行者小屋に到着。驚いたことにすれ違つたり、追いつ越されたりの登山者は三十人ほどもいる。しかも通年営業の山小屋が数件あつて、都心からそう遠くないこの山域は人気が高い。雪も新潟に比べてずつと少なく、逆に氷結を楽しみにやつてくる登山者が多いという。

テント場には、平日だというのに十個近いテントがカラフルだ。荷を降ろし、テントを広げて設営完了すれば、美味しい食事が待っている…。「しまつた! 入っているはずのポールがない!」勘違いして出かけてきたとかで、再度の悪夢が! 「雪洞掘る以外にない」ツレがスコップで切り出した雪のブロックを、私が積み重ねてコの字型に並べてゆく。薄暗くなり雪が舞い始めた。疲れたと言うと「凍えないように動け、働け!」

これこそ映画「デルスウザーラ」のワンシーン、遭難しないように動けという場面ではないか。吹雪に変わる頃、テント布を屋根に設置、ようやく雪洞完成。シートに寝袋を広げ、プリムスで暖をとる。熱い味噌汁と食事にホッと眠りについた頃…。降り積もつた雪で屋根がつぶれた! 雪まみれとなり、慌てて飛び起きる。雪を払い、雪洞の補修を朝まで数回。もはや、甘いかき氷どころではなく赤岳アタックの意欲も失せ、夜明けと共にテントを撤収。濡れて更に重くなったムダな荷物を担いで、下山。教訓「氷の世界は甘くない」

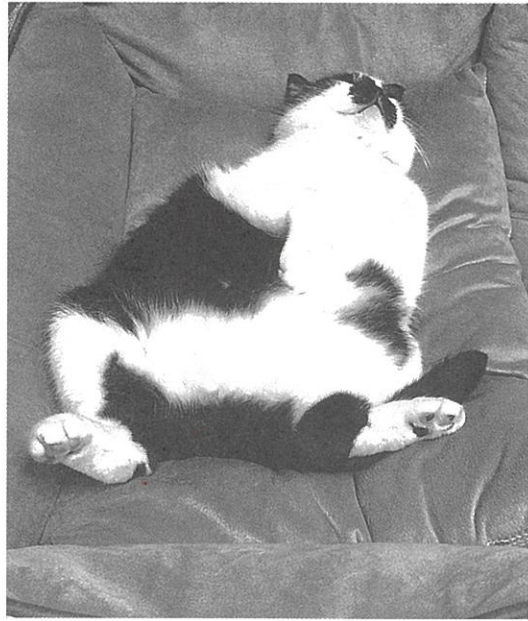


ツレに荷物を押し付けて余裕のほずが…

ボブの独り言

春がそこまで来ています

ボブの独り言



昨年は境内の落ち葉掃きが終わらないうちに雪が降り積もったものですが、落ち葉で詰まってしまうと、二階の坐禅堂の横にあるペランダは、普段誰もいかないうちで副住職が水を捨てにいったら、ペランダに溜まった雪解け水が廊下

はありませんか。新聞紙を敷き詰め、いらなくなつたバスタオルで入ってくる水を防いでから、排水口を探すのがひと苦勞。バケツで汲み上げて、も限度がありますから、急遽ホームセンターから買ってきた小さなポンプが凄く役立ちました。二月の下旬頃から長岡では珍しく、すき通るよ

うな青空が続き、あれだけ積もっていた雪も目に見えて少なくなっていくのがわかります。そんな中、庭ではクリスマスローズの古い葉の間から淡い緑の新しい葉がいつぱい見え始めました。それと同時に、雪が沢山積もっている庭から紅い花があちこちで見え隠れしています。いろんな種類の椿が咲くお寺の庭、雪深い中で育まれた植物は力強いパワーを感じます。そんな時期になるといつの間にか、足先のしめやけも治っていたり、かかとのカサカサもスベスベになつていたり。代わつて、くしゃみが出たり、鼻水と。といった具合に「花粉症」で悩まされる人が多くなり、「黄砂」といって

迷惑なものが飛んできた、大変なものです。近頃のお祭りを子供達に見せたい」といつも年よりもひと月遅く里帰りをした久美さん。お祭りで一〇〇軒近くの屋台が並ぶとのこと。長岡ではどこを探してもそんなお祭りはないですからね。「何を買ってもらったの？」に「綿あめ」。行く前は幼稚園がインフルエンザが多くなつたこと、登園自粛をしていた真人君、久々の幼稚園も元気でした。留守中は何となく落ち着かなかつた私も、ようやく炬燵の中にも寝れるようになり幸せです。ニヤーン！

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

- 原稿の例
- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
 - 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
 - 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
 - 嬉しい・楽しい／嬉しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

先月、シリアで日本人が殺害される痛ましい事件がありました。そのようすが、一部インターネットで流されたそうです。ある中学校では、先生が生徒に見せたという報道もなされました。それについても、人を何のためらいもなく殺してしまふ、また画面を通してそれを見せしてしまうことに対して恐ろしく感じています。昨今の子供たちはゲーム感覚で、人を殺してしまふ、死に対してマヒしているように感じられるのは、私だけでしょうか。

七十一年前の戦争で日本のために、泣く泣く死んで行かれた兵隊さんのことを、忘れてはいけません。

一昨年私の父親が自宅で亡くなりました。安善寺様、檀家の皆様に大変お世話になりました。父親は生前より病院へは行かないで、家で亡くなりたいと申しており、その願いはかないました。私の子供や孫もじいちゃんの死を現実として受けとめられたと、思っています。私も同級生が六十歳前後で、十数人あの世へ旅立ちました。死の世界が現実となつてきます。あの世とはどのような世界なのか、どんな高僧の方でも分からないと思います。ただ、これだけは私にもわかります。それは死んでしまつたら、妻や子供たち家族とは会えなくなつてしまふ事、自分の生まれ育つた長岡にはいられなくなり、好きな酒やたべものは口に入らなくなつてしまふ事です。命を粗末にはいきません。そのためには、世界平和を願い、日ごろから健康に留意して、一日一度はご先祖様に手を合せて過ごしましょう。室賀清輝

第七十号、夏号は平成二十七年七月十七日(金)発刊予定です